

小松英輔氏とソシユール文献学

本書は、元学習院大学教授の小松英輔氏がこれまでに発表されてきたソシユールに関する主要論文およびソシユールの自伝的回想の邦訳を収録したものである。

フェルディナン・ド・ソシユールの名が冠せられている「一般言語学講義」は、弟子にあたるシャルル・バイイとアルベール・セシユエの手によって編纂・執筆されて、ソシユールの死後三年目にあたる一九一六年に刊行された。現代言語学の公認聖書のごとき権威を賦与され、現代思想の原点などと評されるこの編著書は、学生の聴講ノートを参照しつつも、三回の異なる講義を「有機的全体」に仕立て上げたもので、その成立そのものにおいて深刻な問題を孕んでいた。小松氏は、「一般言語学講義」に出席した学生の聴講ノートを判読転写して三回の講義の校訂版を世界に先駆けて刊行したことで、国際的に令名を馳せた研究者である。パーガモン社から刊行された校訂版には見開きで英語の対訳が付されており、刊行当時から国際的反響を呼び、バリ言語学会誌の書評欄でも取り上げられ、現在でも研究論文で頻りに参照されている。日本の読者は今日この校訂版を日本語で読むことができる恩恵に浴している。

私が小松氏からの誘いに応じて、「一般言語学講義」の校訂版作成に協力したのは、一九九四年から九五年にかけてのことであったと思う。学習院大学の小松氏の研究室で、今は亡き三宅徳嘉先生と三人で輪読会が行われた。輪読会では、小松氏が聴講ノートを判読転写した原稿を、聴講ノートのコピーと読み比べながら一字一句検討を重ねていくという地を這うような作業が、昼過ぎから夕方まで連日行われた。どの位の期間であったのか、今では正

確に思い出せないが、該博な言語学的知識を惜しむことなく懇切丁寧にご教示して下さった三宅先生の穏和な表情や小松氏の単独登頂を目指す登山家の如き面影が今でも彷彿として記憶に甦ってきて、懐かしさを禁じえない。

小松氏が、フィルム二三〇本、八二〇〇コマにも及ぶ膨大な量の原資料へのアプローチを決意し敢行された経緯は、本書収録の「ソシユールの原資料」で詳しく述べられている。原資料の評価において丸山圭三郎氏との間に齟齬をきたしたというエピソードは、読者には意外に思われるかもしれないが、今から振り返ってみると、実に象徴的である。なぜならば、そのエピソードにはソシユール研究の相異なる二つの方向が凝縮されて示されているからである。丸山氏が「ソシユールの思想」等々の著書で、現代思想の観点からこの不世出の言語学的天才を論じ、ソシユールの名を世に知らしめた功績は何よりもまず評価されて然るべきであるし、文化論、文明論へ勇躍された氏の仕事に刺激を受けた人も数多い。それはソシユールの創造的受容とも言うべきものであって、それ自体はなんら批難に値しない。もともと人は自分の文脈にひきつけて過去のテキスト、異なる文化圏のテキストを解釈するものなのであり、時空を隔てたテキストが異なる文脈に移し入れられ、別の言語に翻訳されて、新たな解釈を紡いでいくことは、テキストの宿命ともいえるべきものである。ソシユール自身も自筆草稿のなかで、起源の文脈から離脱して転生を重ねていく言葉の運動に言葉の「第二の生」を認め、それまでの哲学者が思考しようとはしなかった言語の本質的な側面がそこに潜んでいることを書き留めている。因みに創造的な受容の例としてはロラン・バルトの「モードの体系」をはじめとする一連の著作があるし、デリダの有名なソシユール読解は「一般言語学講義」に「音声中心主義への従属」を読み取るというものであった。もつともデリダの視界には、文字を唯一の対象としていた文献学から脱却して音声やパロールをようやく対象にし始めた十九世紀後半の言語学内的脈絡は入っていないかっただようである。他方では、方向性において正反対の読解も存在する。ソシユールの言語学的探究を、彼が生きた歴史的な脈において、そのかけがえのない個性において丹念に読み解こうとする文献学的営為がそれである。言

うまでもなく、小松氏の仕事は基本的には後者に属すると言えよう。そしてこの二つの読解の方向性は、書かれた際の文脈と解釈される際の文脈の双方に跨って存在するテキストの根源的な二重性に因るものであり、本質的には、二つの方向のいずれに軍配をあげるかなどという性質の問題ではない。そもそも人はどれほど客観的たるうとしてもみずからの問題設定とその背後に控える先入見から完全に自由ではありえない。同様に、いかに対象を現在化して解釈を施そうとしても、対象に潜んでいる過去の影を完全に払拭することはできないだろう。テキストにおける語の選択と配列そのものは解釈者の恣意に全面的に委ねられるわけではないからである。言い換えれば、読者によるテキストの同化には多かれ少なかれ暴力が伴い、テキストの異化には別離の影が射すものなのである。そして、異化を通して頭われてくる他者をわれわれにとつての他者として認め同定することによって、読者はその他者を鏡にして自らの先入見の一端を反省し、自己認識を深めることになるだろう。こうして異化は反転して同化に繋がることになる。そこに解釈学的な理解と呼ばれる精神のしたたかな働きをみることができよう。

しかしながら、ソシュールをもつばら現在に同化する解釈が跳梁するようになると、しばしば歴史的文脈が無視され、論じる者の信念や思想、世界観を吐露する傾向が露わになりがちであることは黙過できない事実である。ソシュールではなくて、ソシュールを論じる者の旺盛な個性が読者の脳裏に強く刻印され、読者の心を領することになる。ソシュールが印欧語を分析したり十九世紀の言語学と無言の対話を重ねていても、その意味を調べようとせず、またそれを理解したい欲求も感じないで、したがってソシュールの考察している対象には大した関心を持たないで、ソシュールをもつばら先駆的な現代思想家として論じることが、われわれの理解をどれほど深めることになるのであろうか。それはあらかじめ答の出ているパズルを解いてみせること以上ではないだろう。そこに欠けているものは、われわれの同時代人ならざる「もう一人のソシュール」がもたらす違和感や衝撃なのである。学術的な装いを凝らすのであれば、やはり研究者は、己をなまなく空しくして、何よりもまず、対象の

分析と理解に寄与するように、読者の眼を開くように努めるべきだろう。十九世紀の言語学的文脈から切り離して一般理論のみを抽象的に取り上げることから、たとえばソシュールの「思想」の最終到達点として「一般言語学講義」を位置づけるというような考えが生まれてくる。ところが、本書の四十頁で小松氏も指摘されているように、そもそもソシュールは講義において一度も「一般言語学」という名称を用いていないのである。それはあくまでも前任者の病氣退職を受けて大学当局が用意した名称であり、ソシュールは気乗りしなまま大学側の指示に従ったにすぎない。一九〇九年一月に学生の一人リードランジェは、ソシュールの言葉として「(一般言語学というような) 主題についての著作を著すことは考えられない。というのは著者の決定的な思想を表明しなければならなくなるのだから」と記録に書き留めている。小松氏が精緻な分析によって明らかにしているように、「一般言語学講義」の編著者は第一章の「言語学史一瞥」を執筆する際に、これまでの言語研究の歴史をラング(言語規範、言語体系)を唯一の対象とする科学(本書四十二頁以下を参照)へ至る過程として提示すべく、聴講ノートを巧妙に書き換えていったのである。そこに一般理論を扱うラングの言語学、すなわち一般言語学こそ師の「決定的な思想」であるという編著者の予断ないしは固定観念が窺えよう。事実、管見の限りでは、自筆草稿においても、ソシュールがみずからの研究を「一般言語学」として積極的に規定している箇所は一つも見あたらない。ソシュールが「一般言語学」の樹立を目指していたという通説は、少なくとも現時点では文献学的な裏付けをまったく欠いているのである。しかし見方を少し変えれば、そうした解釈が検討されることもなく自明のことのように流布し、今日のソシュール研究の方向をも規定しているということ自体、弟子たちの手による「一般言語学講義」の影響を払拭することがいかに困難であるかということを実に物語っているのである。本書の目次にも明らかのように、小松氏の文献学的研究は、晩年の「一般言語学講義」の復元に限られていたわけではない。ソシュールのトリスタン神話やアナグラムをめぐる考察をすでに一九八〇年代に視野に収めて、濃霧の立

ちこめる自筆草稿の原野への探索の旅をすでに開始されていたのであった。加筆や削除にしばしば覆われている草稿は、初歩的な知識を持ち合わせていない学生を相手にした「一般言語学講義」の聴講ノートとは趣が大きく異なり、暗中模索の探究の過程を生々しく伝えている。当時の言語学の埒には到底収まらない、広範囲にわたるこうした探究の底流には、しかしながら、つねに記号や言語の同一性とは何か、という根本的な問いがあることに留意しておきたい。さらに本書では触れられてはいないが、一九九六年にはジュネーヴのソシユール邸から夥しい量にのぼる自筆草稿が発見されるという出来事が起こっている。「言語の科学」とソシユールの手によって題されたその一部は、ガリマール社から編者のエンゲラーとブーケによって「一般言語学著作」 *Œuvres de linguistique générale* なる問題含みの書名のもとに、二〇〇二年に刊行されている。そうした書名は、諸々の個別言語の研究の外側に、謂わば超越的な一般言語学が成立しうるかのような印象を与えずにはおかない。第三回講義が始まって間もない一九一〇年十一月四日の講義では、ソシユールは「もともと一般的なものを取り上げれば、この完全で全一的な対象をもつことになる」と考えることは、誤りであろう」と注意を喚起していた。音と観念との独特な結びつきである言葉は、それを物理的な音や超歴史的な概念に還元する抽象的一般化によってたちまち霧散してしまうところの、非物質的な結晶なのである。その結晶は話者を離れては、したがって話者の生きていた時と場所を離れては、実現されることはない。「一般言語学著作」という書名は、具体的な時と場所の桎梏を越えた汎時的な観念の成立不可能性に達着していたソシユールの「思想の劇」(パンヴェニスト)を、弟子たちに倣って一般言語学なるものの理論的素描に解消してしまう怖れがある。こうした一筋縄ではいかない二重性を刻印された言語を対象にした科学は、いかにして、あるいは、そもそも成立可能なのか、こうした問いに導かれ翻弄されながらソシユールが書き残した草稿群には、彼がなぜ一八九〇年代に言語学の書物を構想しながら断念放棄するに至ったのか、なぜ「一般言語学講義」のような体裁の書物を取って刊行しようとはしなかったのか、

その理由の一端を解き明かす鍵が秘匿されているのではないだろうか。書庫の奥で一世紀余り眠っていた文字が目覚め、ゆっくりと身を起し、それらが光源となってどのような光をいかなる方向に発することになるのか、ソシユール文献学は、ソシユール没後一世紀を迎えようとしている今日でもなお道半ばなのだと言ってもおそろしく過言ではないだろう。

広大無辺とはいえ、古今東西にわたる言語と言語論の海を水面近くで遊泳してまわるのは、そうむずかしいことではない。だが、その深海にじっと身を潜めながら、激越な水圧をもとせずに、じっとこれに堪え、(言語の科学)の可能性と不可能性の境界線上に身を持っていくことは並大抵のことではない。言語一般への問いをあくまでも具体的な言語事象の分析と表裏一体のものとして深めていったソシユール、饒舌な抽象的思弁を潔癖に斥けると同時にみずからの学的操作に潜んでいる暗黙の前提への徹底した反省を深めていったソシユールを他でもない言語学的思考の先蹤としえないとすれば、言語研究にとって不幸なことである。日本の研究者は、言語論の渦中の単なる泡沫でないためには、小松英輔氏の先駆的な文献学的探究の成果を貴重な財産として所有することを誇りとすべきであろう。

この序文の執筆は、小松三恵子夫人からエディット・バルクの相原奈津江氏を通じて依頼されたものであることを、最後に書き添えておきたい。小松氏は現在病の床に臥されている。氏が恢復されて本書を手にとられる日が近く訪れることを祈念しながら、筆を擱きたいと思う。

二〇一一年四月

松澤和宏